

ある。独語原本と現代語訳は、「正鶴」はZweck目的、「弓矢」はMittel手段だ。前述の患者は目的か手段か、と対応する。

Hufelandはカントの影響を受けたとされる。カントの『道徳形而上学原論』（1785）には「君自身の人格ならびに他のすべての人の人格に例外なく存するところの人間性を、いつでもまたいかなる場合にも同時に目的として使用し決して単なる手段として使用してはならない」（篠田英雄 訳、岩波書店、1960）とある。

オートノミーは古代ギリシャ語に由来する。カントにより、上記のように表現され、また前述の4原則に取り入れられ世界に広がった。現在の臨床試験では、受刑者、学生、精神障がい者などの

「社会的弱者」を試験対象者とする場合は十分な留意が必要とされる。オートノミーに基づいた判断ができないためだ。青洲の「通仙散」開発に参加した妻と母親は「嫁と姑」の関係にあった。彼女らは家庭の中では、青洲に対しての「社会的弱者」だったかもしれない。医術は「不仁」が不可避であるがゆえに「仁」をなすべきという対の表現の中に、雲澤は臨床試験一般において個別的倫理と集会的倫理のジレンマが避けられないことのメッセージを込めていた、が第3の解釈である。

注記：本研究の一部は、2019（令和元）年11月2日長崎で開催された第84回日本健康学会総会・ミニシンポジウム「戦前・戦中の医学研究再考」で発表された。

（令和2年10月例会）

江戸時代の経穴学にみる考証と折衷 ——小坂元祐と山崎宗運を事例に

加畑 聡子

1. はじめに

躋寿館は、明和2（1765）年幕府医官多紀家五代の元孝によって創建され、天明・寛政期には幕臣以外の藩医、町医等も対象に百日間の限定的な開講、いわゆる百日教育を行ったことで知られている。寛政3（1791）年に江戸医学館として官立化した後は、幕府医官を対象に臨床教育活動を行う一方で、考証学の基礎を固めて発展させた。その沿革を勘案し、本報告では江戸医学館及びその前身である躋寿館の設立時期を医学公教育形成期と位置づけ、当該時期に経穴学教育を担った小坂元祐と山崎宗運の事蹟について発表した。

2. 小坂元祐について

小坂元祐（?-1815、名は宮昇、号は牛淵）は、丹波亀山藩医であり、躋寿館における百日教育時の経穴学講師を務めた。その著作『経穴纂要』（文化7〈1810〉年序）は、多紀元簡撰『揆穴集説』、原南陽撰『経穴彙解』と並ぶ江戸期を代表する経穴書の1つとされている。

『経穴纂要』自序の記載「古昔、論経絡者、雖極衆多、其要皆本於素靈矣。而素靈之為書、幽遠簡古、多不可得而通曉者、則其本之之論、亦多不可得而通曉者、則固矣。」には、当時の医者が『素問』『靈樞』を通曉せずに、『十四経發揮』を用いて簡便に経穴を体得していたことに対する、元祐の問題意識が表れている。そこで、『十四経發揮』を底本とし、古人の説を引用した上で、古医書に依拠して考証しながらも、初学者に配慮した形で著述したのである。その一方で、卷之二には「寛政庚戌冬、予得刑人骸鮮而視之。」と記され、寛政2（1790）年に自ら腑分けを実見した経験に基づき、内景や身体部位の名称について、解剖知識を踏まえて考証していたことがわかる。また、同書には、江戸期に活躍した医者とされる菊池玄蔵、安井元越、宮本春仙、中島元春、浅井頼母、村上宗占、堀元厚、饗庭東庵、山本玄通、谷村玄仙らの説を引用して、より広範かつ詳細な注釈がつけられている。

3. 山崎宗運について

山崎宗運(1761-1834, 名は次善, 字は子政)は、代々幕府医官を務めた山崎氏五代目の鍼医で、寛政4(1792)年に江戸医学館の鍼科教諭となった。『釈骨』(沈冠雲撰, 乾隆45<1780>年刊)の翻刻や『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』(書写年不詳, 台湾国立故宮博物院図書館所蔵)の校正補注で知られ、「銅人形」(東京国立博物館所蔵)を鑄造せしめた人物と言われている。

宗運が製作したと見られる「骨度折量法尺式」(長野仁氏所蔵)は、紙尺を包む一枚の長方形の用紙で、『釈骨』と共に一帙に収められている。その表面には「骨度折量尺 寄所寄楼蔵板」と記され、「闊狭界尺」及び「闊狭界寸」と呼ばれる分度器のような台形のスケールが描かれている。裏面には「骨度折量法尺式」と題し、末には制作時期とみられる「天明丁未十月」(天明7<1787>年10月)の他、基準となる骨度、製作背景、そして「量法」すなわち紙尺及び「闊狭界尺」の使用方法が記されている。付属する紙尺は、「量尺」とされる長尺8種類、計10本(「頭囲量尺」1本、「胸囲量尺」1本、「腰囲量尺」2本、「脊量尺」1本、「肩至肘量尺」1本、「肘去腕量尺」1本、「髀枢下至膝中量尺」2本、「内輔下廉至内踝量尺」1本)、「法尺」とされる短尺2本(「頭胸腰手足法尺」1本、「脊上下法尺附裏尺」1本)に分けられる。

「量法」によれば、宗運は『靈枢』骨度篇に記載される8つの骨度が最も計り難く、後学が骨度を省略して測定していたことを憂慮し、「骨度折量法尺式」を製作した。さらに人身には老若や大小、肥瘦があることを踏まえた上で、この紙尺を用いて測定すれば「経旨」すなわち『靈枢』の記載と違いなく速やかに分寸がわかるとしていた。実際に、実寸を測定した結果、「量尺」と「法尺」の長さの比は、『靈枢』骨度篇に記載される分寸の比率と一致していた。つまり、本資料は、実寸や度量衡を問わず、『靈枢』骨度篇の記載に則した骨度の測定や取穴を可能にするものであり、古医書に依拠しながらも、より精確かつ実用的な取穴法を考案することを意図して制作されたのである。

宗運の自筆稿本と見られる『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』は、『銅人腧穴鍼灸図経』(宋・王惟一撰)の校正補注であり、全冊にわたる小字注の他に、宗運による加筆と見られる「大椎攷」「脊椎法」「魚骨弁」「横寸攷」「背腧草度法」「八膠攷」「腹部量法攷」が、地冊に記載されている。加筆内容を見ると、古医書の記載及び堀元厚を始めとする江戸期の諸派の学説を引用すると同時に、解剖学的視点により考証を行い、経穴位置の同定を試みたことがわかる。石川元混著『灸穴図解』上巻「八膠」に見える「山崎宗運、嘗西医ノ骨度ニ拠テ、別ニ八膠ヲ揆ルノ一法アリ。詳ニ図解ニ見タリ。」の記載は、宗運が西洋の解剖知識を参考していたことの証左と言えよう。

4. 考察・結語

小坂元祐と山崎宗運の事蹟は、『素問』『靈枢』を尊重しつつも、考証にあたっては古医書のみならず、諸派の学説や解剖知識を折衷していた点において一致していた。このことは、より多角的な観点から、客観的かつ実証性の高い経穴学を追求することを目的とした、医学公教育形成期の経穴学における1つの考証の態様と見なした。

本発表の内容は、以下に収載されている。

加畑聡子. 山崎宗運の経穴学について—『釈骨』と「骨度折量法尺式」を中心に—. 日本医史学雑誌 2018; 64(4) 355-368

加畑聡子. 山崎宗運の『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』に見える加筆について. 伝統鍼灸 2020; 47(2) 146-162

加畑聡子. 江戸医学館官立化時期における小坂元祐の経穴学教育. 伝統鍼灸 2016; 43(1) 24-42

加畑聡子. 江戸時代経穴学にみる考証と折衷—小坂元祐と山崎宗運を事例に—. 講座 近代日本と漢学 第3巻 漢学と医学. 東京: 戎光祥出版; 2020. p.46-60

(2020年11月例会)